

## 『ソヴェート文学』 100号

草 鹿 外 吉

私の手元に季刊『ソヴェート文学』の100号がある。昭和62年8月25日発行と奥付けにあるが、その「編集後記」には次のようにしるされている。

「ソ連作家同盟の機関誌の一つである『ソヴェート文学』（外国語版）の編集部と日本のソヴェート文学研究会（代表・黒田辰男）の共同編集というユニークな編集方式により1964年に誕生した弊誌の刊行もここに100号の大台に乗った。季刊の雑誌が100号ということは25年を要するわけだが、弊誌の場合、一時期隔月刊の時代があったためにこうなった。装いを新たに群像社から出るようになって26号目である」

「100号の大台にのった」雑誌『ソヴェート文学』は一体どのような経緯で発刊されたのであろうか。その事情については、「編集後記」も指摘しているが、同じ『ソヴェート文学』91号（1985年3月）に載った黒田辰男「回想（その1）、『ソヴェート文学』の20年」（「その2、私のソヴェート文学60年」は94号）に詳しい。それによると、次のとおりである。

黒田氏は1960年にはじめて訪ソし、その2年後、すなわち1963年（昭和38年）の6月末にふたたびソ連に赴いた。当時、ソ連作家同盟の外国向け機関誌『ソヴェート文学』の編集長は作家のワシーリイ・ニコラーエヴィチ・アジャーエフ（1915～1968）であった。黒田氏は次のように書いている。

「1963年に私がモスクワに滞在のとき、アジャーエフ氏は、私が彼の大作『モスクワを遠くはなれて』を1951～52年に（創芸社発行、鹿島保夫・丸山政男との共訳）刊行していたこと、また私たちが雑誌『ソヴェート文学』を日本において出版していたことを知っていて、その雑誌の内容、ことに第4号の翻訳特集号がソ連の『ソヴェート文学』と同じ性質のものであることを知って、『ソヴェート文学』日本語版の発行を私に提案した。私はそれについて私たちの研究会と協議することを前提としながら、そのプランが実現性の多いものであろうと答えた。そしてまたそれによって私たちの雑誌『ソヴェート文学』の内容が一そう充実したものになり得るであろうとも考え、その提案を一応うけ

入れた。そしてその年（1963年）の9月に帰国後、われわれの『ソヴェート文学』のメンバーと協議した上、翌1964年の10月に翻訳紹介誌としての『ソヴェート文学』が年4回発行の雑誌として生まれたのであった。『ソヴェート簡約文学百科辞典』の第6巻には、この日本語版の『ソヴェート文学』の刊行開始が記されている」

ここで黒田氏が「私たちが雑誌『ソヴェート文学』を日本において出版していた」と記しているのは、今日100号を迎えた翻訳雑誌ではなく、それとは別の雑誌なのである。両者の創刊にかかわったものの一人として、その点も黒田氏の「回想」から引用して説明しておこう。黒田氏はこう述べている。

「翻訳紹介誌『ソヴェート文学』の刊行には、それに先立つ前史のようなものがある。それは、この雑誌と同名の雑誌がその前に同じく季刊で六冊刊行されていたのである。この第一次の『ソヴェート文学』は、ロシアおよびソヴェートの文学にかんする研究誌として、翻訳紹介誌『ソヴェート文学』が刊行され始める二年前に創刊されていた。

この研究誌を刊行した主体は、早稲田大学文学部大学院のロシア文学の専攻科、アスピラント課程で、当時この課程を指導していた私をふくめての新谷敬三郎、草鹿外吉、法橋和彦らを中心とする研究者たちによって組織された「ソヴェート文学研究会」で、「清新なアカデミズム」を標榜した純粋な研究誌をめざして発足した」

私たちの「ソヴェート文学研究会」で、1963年にソ連から帰った黒田氏の提唱する翻訳紹介雑誌を刊行しようということには、幾つかの議論があった。にもかかわらず、結局はそれが発行され、24年後の今日にまで至ったのは、ひとえにソヴェート文学を信奉、熱愛する黒田氏の説得によるものであり、そしてまた、この研究会が氏も述べているように早稲田大学における黒田門下によって形成されていたという事情に負うものであった。



こうして創刊された雑誌『ソヴェート文学』は、創刊号から50号までは理想社から、51号から74号までは飯塚書店から出版され、1981年春の75号から、群像社によって出版されるようになった。その間、たとえば理想社から飯塚書店に移る過程で秋津書店、東宣出版などが制作に当たった事情などが介在するなど、さまざまな困難を乗り越えて、このあまり売れない雑誌が100号に至った訳である。それには関係者一同の並々ならぬ苦労が潜んでいたが、なによりもそれが主宰者、黒田辰男氏の物心両面の努力の賜物であることを、ここに強調

しなければならない。

さて、雑誌『ソヴェート文学』の功績は多々、挙げられるが、何をおいても24年間、絶やさずソ連の文学事情、時宜に応じての諸作品を紹介しつづけ、今日においても十分に資料的価値を有する蓄積を残したことであろう。第1号のゴンチャール『トロンカ』（小野理子訳）、1～2号のリパートフ『エゴール・スーズンの死』をはじめとして、この雑誌には早くから、アントーノフ、テンドリャコフ、シュクシーン、ナギービン、カザコフ、ペローフ、トリーフォノフ、シーム、ラスプーチン、ボンダレフ、ワシーリエフ、アスターフィエフのような第二次大戦後から今日までに輩出した作家群、さらに、ルイトヘウ、アイトマートフ、サンギ、マテヴォジャン、ブイコフ、キム、ドゥムバーゼといった新しい諸民族作家群の作品が次々と掲載され、現代ソヴェート文学が広く紹介されてきた。詩人にしても60年代に華々しく登場したヴォズネSENSキイ、エフトゥシェンコ、ロジェストウェンスキイ、アフマドゥーリナ、オクジャワ、ヴィソーツキイなどを始め、幅広く翻訳されている。

更に、パウストーフスキイ、チュコーフスキイ、エレンブルグ、カタージェフ、フェージン、ショーロホフ、あるいはトワルドーフスキイ、アセーエフ、ベルゴリツ、アフマートワなど、今は亡きソヴェート文学の古典的作家、詩人たちの知られざる作品、ゾーシチェンコ、プラトーノフ、バーベリなど、かつて文学的、政治的に弾圧を蒙った作家たちの紹介など、歴史的にも興味深いものが多い。特にアクショーフ、ウラジーモフ、ネクラーフ、クズネツォーフなど、その後、ソ連から亡命してしまった作家たちのかつての作品を見る時、グラスノスチの叫ばれている今日、今後のかれらの運命を思わずにはいられない。

しかし、共同編集といっても、ほとんどがソ連作家同盟の『ソヴェート文学』編集部でそれがなされてしまうので、ソ連側の意向が大きく反映されるということになりがちである。66号、67号にはブレジネフの回想録が大きなページをとって翻訳されているが、このときには、掲載するかれの写真の大きさをめぐってソ連側と意見をことにし、日本側の意見どおりにしたこともあった。

群像社に移ってからの雑誌には、さらに新しい作家たちが精力的に紹介されると同時に、「新鋭作家短編特集」(88)「現代ソ連SF小説特集」(98)ドストエーフスキイ(78)マヤコーフスキイ(84)ゴーゴリ(87)プーシキン(99)等の特集、またワルワーラ・ブブノワの生誕100周年特集などユニークな企画も現れて来た。かつ、ヴォズネSENSキイ『O』、グレーコワ『未亡人たち

の船』、テンドリャコフ『報復』、ラスプーチン『火事』、あるいはブルガーコフの小説『白衛軍』のうちの未発表の一章など、いわば問題作も精力的に発表されている。

100号にわたる作品をここにすべて挙げる訳にはいかないが、その全貌は100号の巻末に付された総目次を参照されたい。小説、詩以外にも、ほとんど各号に評論、書簡、回想、演劇・映画論、作家のインタビュー、資料・書評、日ソ文化交流、そして戯曲などが掲載され、それらを通覧することによって四半世紀におよぶソ連の文化・文学の概要を知り得るであろう。とりわけ40号以降にはソ連各民族の絵画・美術のグラビアとその解説が掲載され、それらの豊かで多様な芸術的土壌を賞味できるように編集されている。

雑誌『ソヴェート文学』の最初の時代には翻訳者たちもまだ若く、その多くが主宰者、黒田氏の門下であったことも影響して、雑誌の翻訳の質が必ずしも良くはなかった。しかし、近年、その質も向上し、十分に原作の味を伝えるに足るものとなりつつある。とりわけ、出版が群像社に移ってから、そのスタッフの努力があり、あたらしい有力なロシア文学者も翻訳に加わり、雑誌全体の質は飛躍的に向上したとあって良かろう。また、今日こうした翻訳発表の舞台が少ないおりから、この雑誌が新人研究者の翻訳発表の場として役立っている側面も、見落とせないといえよう。

このような雑誌の一層の継続を願うのは筆者一人ではあるまい。功罪は種々あるにせよ、すでにそれは文学史的存在といっても、言い過ぎではないのである。